鳥取県

研究協力校（課程又は障害種）

・鳥取県立鳥取聾学校（聴覚）
・鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校（聴覚）

研究の成果

観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

１．　校内研修会及び学部研究会等による共通理解・合意形成

鳥取県では、鳥取県立鳥取聾学校（以下、「本校」）及び鳥取県立鳥取聾学校ひまわり分校（以下、「ひまわり分校」）の両校が共通して、多様化する幼児児童生徒の教育的ニーズに応えるために、個々の実態を多面的に整理・分析し、自立活動や教科等を横断的に関連させた指導方法や指導体制等を工夫改善することによって、基礎的・基本的な知識及び技能（幼稚部は「知識及び技能の基礎」）の確実な習得を図ることを目的として実践研究を行った。

「本校」では、「言語の力」を全体の研究テーマとして設定し、各学部の実態に合わせてテーマを設定した。幼稚部では「言語概念の育成」、小学部では「読みの力の育成」、中学部では「言語による思考力の伸長」、高等部では「自己を客観的に捉えたり、多角的に捉えたりする質の高い思考力」とした。これらのテーマをもとに、各学部で月に１回学部研究会及び分掌会を開き、教職員間の共通理解を進めた。

また、「ひまわり分校」でも、毎週の学部会や、月１回行われる職員研修会で教職員間の共通理解を深めた。とりわけ、定期的に教職員がお互いの授業を参観し、学び合う「参観ウィーク」を設定した。その際、「参観アンケート」（資料１）を作成することで、授業者が観点を意識した授業づくりに心がけるとともに、参観者も明確な視点で授業を参観することができた。こうした教職員間での

参観ウィーク　アンケート用紙

記入者（　　）

参観日：　　月　　日（　　）　　校時	
ひよこ・幼・小・中（　　）年・組　活動・教科等（　　）	
【参観授業の観点】	チェック ◎・○・△
実態に応じた「めあて」が設定されている。	
思考をくすぐる６つの活動を意識して発問している。	
子どもの思考している姿が見える。（発表、記入、観察等）	
子どもの理解を促す教材が準備されている。	
学習のポイントや扱うことば等が視覚的に提示されている。	
学習の展開（つかむ・思考する・表現する・まとめる）に応じた板書がなされている。	
子どもの発言を板書に残している。	
めあてに沿った振り返りがなされている。	
本時の学習「めあて」を達成している。	
＜感想・アドバイス 等＞	

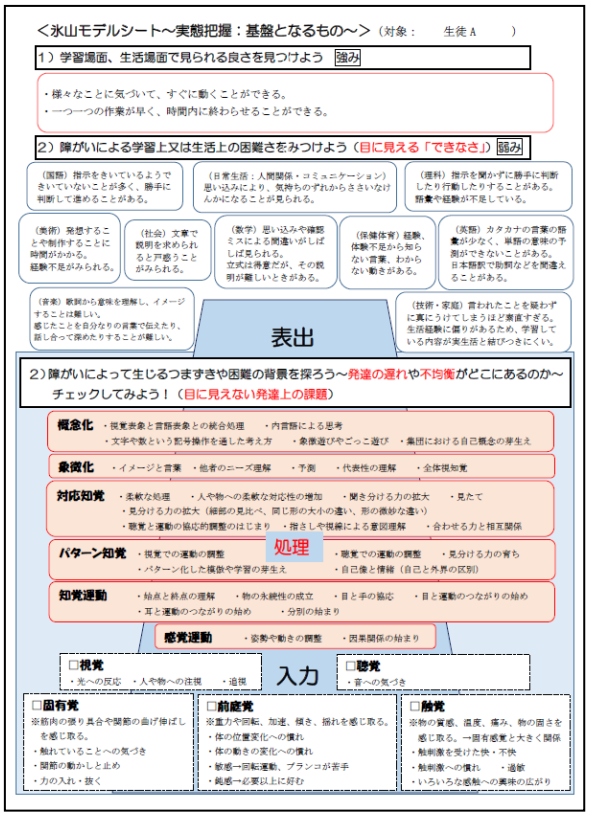
資料１　参加ウィーク　アンケート用紙

他者評価を通じて、授業改善に取り組んだ。

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2-1.　「氷山モデルシート」の作成・活用

研究目的の一部にもなっている、個々の実態の多面的な整理・分析のために、「氷山モデルシート」（資料２）を作成し、それぞれの子どもの実態把握に活用した。具体的には、「氷山モデルシート」を用いて、個々の子どもの各教科や日常生活の中で見られる強み・弱みを具体的に記入し、弱みや課題の姿につながる要因は何かを検討した。例えば「教科書や資料から必要な情報を取り出すことが難しい」といった課題が共通して挙げられた生徒について、感覚や運動の発達の視点から視覚情報の処理の難しさと関連があると考え、自立活動の指導につなげた。「ひまわり分校」は、規模の小さい教職員集団であるが、全教職員で幼稚部から中学部までの幼児児童生徒に関わり、多面的に実態を把握することを意識している。こうした取組を継続的に行うことで、実態把握をもとに授業を組み立てるという流れが定着し、多様化する実態に対応する組織的な取組が可能となった。

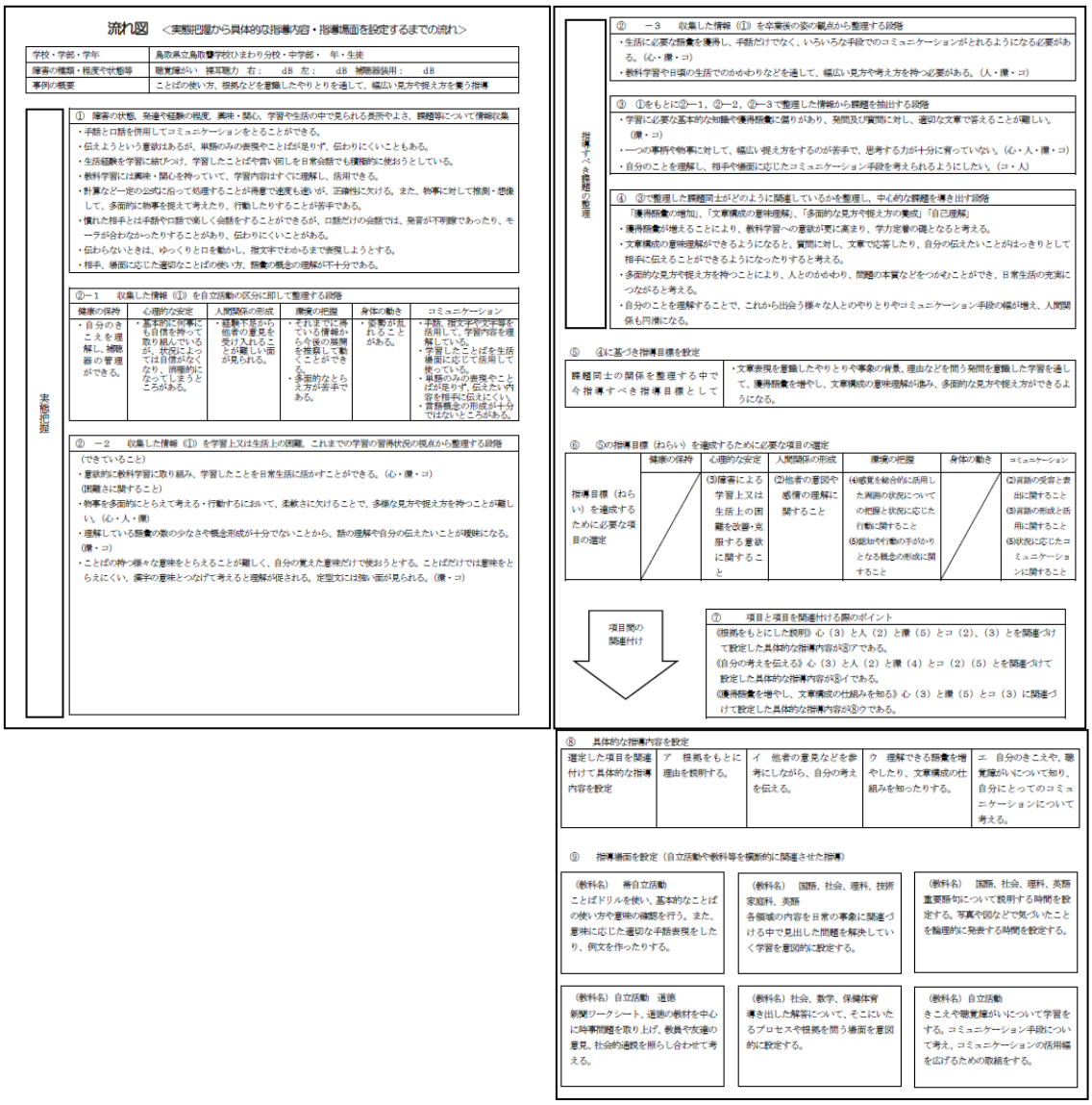


資料２　「氷山モデルシート」

2-2.　自立活動や教科等を横断的に関連させた指導の工夫

上記の実態把握をした個々の学習上又は生活上の困難やそれに基づく指導目標、指導方法を教科等横断的な視点で取り組むために、「本校」では、自立活動の個別の指導計画を修正し、「ひまわり分校」では、「自立活動の流れ図」（資料３）を作成した。

どちらも、具体的な指導場面について書き込む欄を加えることで、「誰が（授業担当者）」「いつ（指導場面）」「何を（指導内容）」「どのように（指導や支援の工夫）」行うのかが明確になり、担任と授業担当者の共通理解のもと取り組むことができるようにした。



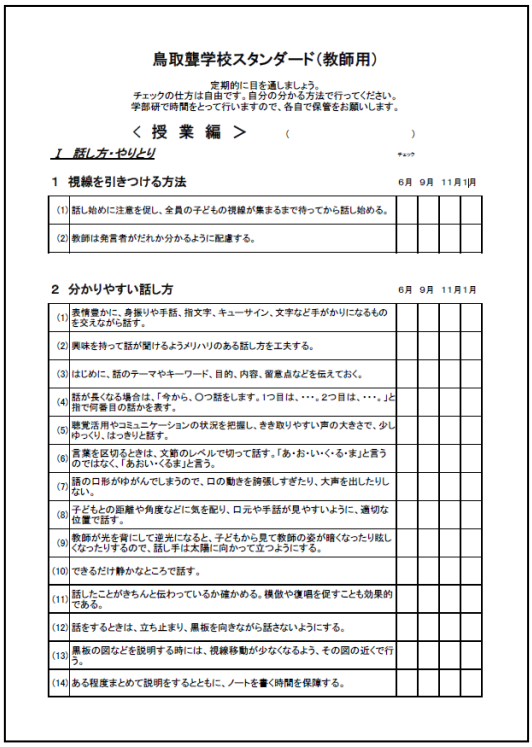
資料３　「自立活動の流れ図」

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3.　スタンダードの作成による基礎的環境整備

両校において、聴覚障害のある幼児児童生徒の共通した実態を踏まえた授業づくりの基本的な留意事項をまとめた「鳥聾スタンダード」（資料 4）及び「ひまわりスタンダード」（資料 5）を作成し、年度初めに全教職員で共有するとともに、新たに定期的な自己評価に活用することで授業づくりの基礎的環境整備を図った。「ひまわり分校」では、「鳥聾スタンダード」を活用しつつ、「ひまわり分校」において大切にしたい事項について「ひまわりスタンダード」で示すようにした。

「鳥聾スタンダード」は、教職員の入れ替わりに対応し、聾学校の教育でどのようなことに気を付けて授業等を行えばよいか、発問や教室環境、声かけ等 5 つの観点からチェック項目を作成した。こうした取組は、教職員全体で授業づくりの視点や方向性に関する共通認識をもつことを可能とするだけでなく、教職員の自己評価や授業参観の視点として活用することで、鳥取聾学校の専門性の維持に役立てるツールとなった。



鳥取聾学校スタンダード（教師用）

定期的に目を通しましょう。
チェックの仕方は自由です。自分の分かる方法で行ってください。
学部研で時間をとって行いますので、各自で保管をお願いします。

＜ 授 業 編 ＞　（　　）

1　話し方・やりとり　チェック

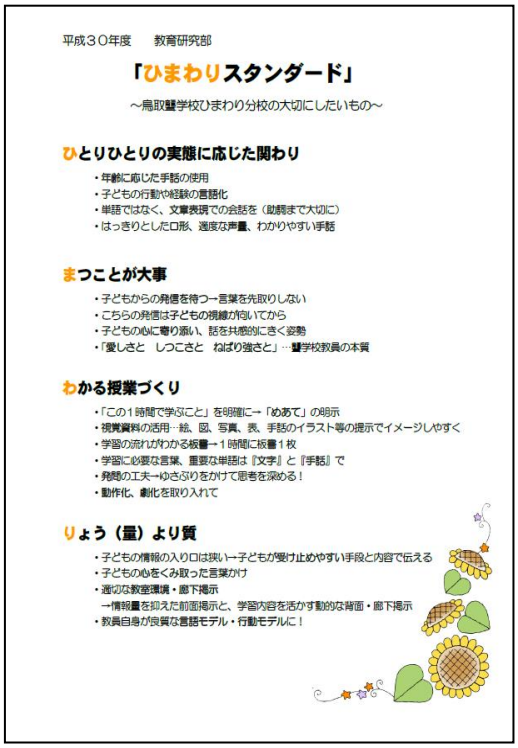
1　視線を引きつける方法　6月　9月　11月1月

(1)	話し始めに注意を促し、全員の子どもの視線が集まるまで待ってから話し始める。				
(2)	教師は発言者がだれか分かるように配慮する。				

2　分かりやすい話し方　6月　9月　11月1月

(1)	表情豊かに、身振りや手話、指文字、キューサイン、文字など手がかりになるものを交えながら話す。				
(2)	興味を持って話が聞けるようメリハリのある話し方を工夫する。				
(3)	はじめに、話のテーマやキーワード、目的、内容、留意点などを伝えておく。				
(4)	話が長くなる場合は、「今から、○つ話をします。1つ目は、・・・。2つ目は、・・・。」と指で何番目の話かを表す。				
(5)	聴覚活用やコミュニケーションの状況を把握し、きき取りやすい声の大きさで、少しゆっくり、はっきりと話す。				
(6)	言葉を区切るときは、文節のレベルで切って話す。「あ・お・い・く・る・ま」と言うのではなく、「あおい・くるま」と言う。				
(7)	語の口形がゆがんでしまうので、口の動きを誇張しすぎたり、大声を出したりしない。				
(8)	子どもとの距離や角度などに気を配り、口元や手話が見やすいように、適切な位置で話す。				
(9)	教師が光を背にして逆光になると、子どもから見て教師の姿が暗くなったり眩しくなったりするので、話し手は太陽に向かって立つようにする。				
(10)	できるだけ静かなところで話す。				
(11)	話したことがきちんと伝わっているか確かめる。模倣や復唱を促すことも効果的である。				
(12)	話をするときは、立ち止まり、黒板を向きながら話さないようにする。				
(13)	黒板の図などを説明する時には、視線移動が少なくなるよう、その図の近くで行う。				
(14)	ある程度まとめて説明をするとともに、ノートを書く時間を保障する。				

資料４　「鳥聾スタンダード」



平成３０年度　教育研究部

「ひまわりスタンダード」

～鳥取聾学校ひまわり分校の大切にしたいもの～

ひとりひとりの実態に応じた関わり
- 年齢に応じた手話の使用
- 子どもの行動や経験の言語化
- 単語ではなく、文章表現での会話を（助詞まで大切に）
- はっきりとした口形、適度な声量、わかりやすい手話

まつことが大事
- 子どもからの発信を待つ→言葉を先取りしない
- こちらの発信は子どもの視線が向いてから
- 子どもの心に寄り添い、話を共感的にきく姿勢
- 「愛しさと　しつこさと　ねばり強さと」…聾学校教員の本質

わかる授業づくり
- 「この１時間で学ぶこと」を明確に→「めあて」の明示
- 視覚資料の活用…絵、図、写真、表、手話のイラスト等の提示でイメージしやすく
- 学習の流れがわかる板書→１時間に板書１枚
- 学習に必要な言葉、重要な単語は『文字』と『手話』で
- 発問の工夫→ゆさぶりをかけて思考を深める！
- 動作化、劇化を取り入れて

りょう（量）より質
- 子どもの情報の入り口は狭い→子どもが受け止めやすい手段と内容で伝える
- 子どもの心をくみ取った言葉かけ
- 適切な教室環境・廊下掲示
  →情報量を抑えた前面掲示と、学習内容を活かす動的な背面・廊下掲示
- 教員自身が良質な言語モデル・行動モデルに！

資料５　「ひまわりスタンダード」

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4.　子どもの実態に合わせた交流及び共同学習

「本校」では、本事業以前から居住地校交流や学校間交流を行っている。学校全体としても幼児児童生徒が少ないため、保護者の中には集団活動を経験してほしいというニーズが強くあった。そのため、幼稚部では、毎週火曜日に居住地の幼稚園・保育所等に出向くという取組を行っている。そうした集団での活動を経て、個々の子どもの集団内での課題を把握し、その後の指導に生かしている。また、小学部では、平成 29 年度より継続的に地域の公民館の方と、こま回し等の昔遊び交流を行い、地域住民との交流を深める取組を行っている（資料 6-1）。

一方、「ひまわり分校」では、校庭がないため、中学部に在籍する生徒が地域の中学校で一緒に新体力テストなどを行ったり、地域の中学校で開かれる手話交流会で、手話の「先生」として、地域の学校の子どもに手話を教える活動を行ったりしている（資料 6-2）。

資料 6-1　あおば公民館との交流

資料 6-2　手話交流会

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　生徒自身による自己評価の取組

生徒による自己評価については、「ひまわり分校」が中心的に取り組んだ。「ひまわり分校」では、授業の「ふりかえりシート」（資料 7）を作成した。「ふりかえりシート」には、「めざす姿」に関する自己評価と、授業担当教職員による他者評価の項目を設け、客観的にその日の学習成果を振り返ることが可能になっている。また、「考えが深まったこと」として生徒が自己の思考を振り返る欄を作成することで、授業における振り返り活動を充実させ、生徒の学びの深まりを図った。

	月　日（　）	自己評価	他者評価
めざす姿 ①	めあてを達成することができた。		
めざす姿 ②	これまでに学習したことを思い出したり、活用したりして、今日の学習ができた。		
めざす姿 ③	先生の問いかけに対して、適切に応えることができた。（発表、説明、行動、書く　など）		
めざす姿 ④	教科書、ノート、ドリル、プリント、辞書などから学習に必要な情報を探して見つけることができた。		
めざす姿 ⑤	今日の学習でわかったことを、手話や文章で説明することができる。		

＜考えが深まったこと＞

例：授業の初めと終わりで自分の考えが変わったこと，授業中に考えたこと，工夫したこと　など

＜先生からのコメント＞

自分の力でできた…◎　サポートを受けてできた…○　難しい、できなかった…△

資料７　「ふりかえりシート」